テーマ：

自分たちの手で作ろう、食べよう、届けよう！

長野県
須坂市立
仁礼小学校
市川先生

この活動の特徴

「凛々子」活用のポイント①

収穫した青いトマトを
常温に置くことで熟成に成功

「凛々子」活用のポイント②

大量に収穫できたトマトを
市内の小中学校の給食に有効活用

活 動 の ね ら い

- 自分たちの手で収穫したものを口にする喜びから、食べ物のありがたみを実感する
- 自分で育てた凛々子を市内小中学校の給食に使ってもらうことで、世の中の役に立つ体験をする

活 動 の 概 要 と 流 れ

対　象　学　年　：　４年生（２１名）
実　践　期　間　：　５～１月

時期	学習活動
５月	地域の農家の方から借りた畑にマルチをかけ、苗を定植
５月～８月	週に１回のペースで畑を観察し、「観察カード」に記入
７月	収穫開始
８月	保護者の方から業務用大型冷凍庫を借り、収穫した凛々子を保管する
９月	５班に分かれて、凛々子を調理する （メニュー：トマトパンケーキ、トマト白玉団子、トマトスープ，ミネストローネ、トマトソースパスタ、トマトクッキー） 農家の方の事情で畑を明け渡すため、急遽樹上に残っている青いトマトを収穫
１０月	青いトマトを試食する 須坂市の給食センターに給食での使用を交渉する 市内の小中学校の給食の「トマトペンネ」に使用される
１月	トマトソースを作り，栽培した小麦粉と組み合わせて手作りピザに挑戦

ここがポイント！取組の工夫と実践の成果

食べ物のありがたみや大切さを知る

食の安全性や透明性が重視されていますが、実際は海外で生産された食べ物がスーパーに並び、生産者の顔が見えない食品を口にしていることもあります。手軽にさまざまな食が手に入る今、食べ物のありがたみや自分で収穫したものを口にする喜び、そして、自分たちの手で栽培したものが世の中の役に立つという「有用感」を味わいたいと考え、活動を構想しました。

学校に集まれる喜び農家の方の畑をたがやす

新型コロナウイルス感染症の影響で分散登校が実施された５月、久しぶりに教室に集まった児童は１１人。農具庫から一人１本のクワをもちだし、近隣の農家の方の畑を目指しました。初夏の陽気で強まる日差しに、野外の作業が久しぶりの子が多いのか、「暑い」、「もうダメ」と弱気を吐きながらも、やり切りました。「学校」を奪われてしまった２か月間を経て、子どもたちの表情はイキイキと輝いて見えました。

自分が名前をつけたトマトを収穫する

凛々子が大きな実をつけて真っ赤に色づいた７月、初めての収穫。まずはそのまま食べることにし、教室でかぶりつきました。子どもたちから「おいしい！」「甘い！」「もっと食べたい！」の声が上がりました。その後も収穫を重ね、校内では保管できないほどの量になったため、保護者の方から業務用冷凍庫をお借りして保管することにしました。暑い中、畑で大量のトマトをカゴに入れ、汗だくになりながら学校に運ぶ日々を過ごしました。

おいしい凛々子を多くの人が食べてくれた

第一回の調理は５つの班に分かれてトマト料理を作りました。凛々子のフルーティーな甘味と酸味にお家の方も舌鼓を打っていました。それを見る子どもたちも満足気でした。

農家の方の事情で畑を明け渡すことになり、急遽すべてのトマトを収穫しました。青いトマトは漬物やピクルスにして味わい、さわやかでシャキシャキした食感に驚きの声も聞かれました。

そんな中、須坂市の給食センターが食材を買い取ってくれるという話を聞き、相談すると実物を見せてほしいという連絡がきました。

大きさも充分で味も良いとの評価で買取りが決定。市内の十一の小学校と四つの中学校、合計約４，５００食分の給食に使用されることに。献立は「トマトペンネ」です。当日は私たちが育てたトマトが使われていることが各学校の放送でアナウンスされました。

先生から一言！実践を通して

市内の給食に使われたことで、自分たちの手で育てたものが役に立つという「有用感」を味わうことができました。おうちの方が喜んだことや給食で多くの人々の口に運ばれたこと、とても良いトマトだと給食センターの栄養教諭からほめられたこと、他のクラスの子から「おいしかった」と伝えられたことなど、人に喜んでもらえる体験ができた子どもたちは、食の大切さと人とのつながりの温かさを感じることができたと思います。

受賞理由

休校が続いた後の栽培活動では、夢中で奮闘する子どもたちの姿がうかがえます。大収穫となった凛々子を自分たちで食べるだけではなく、市の給食センターに交渉して市内の約４，５００食もの給食に使用されたことは、子どもたちが世の中の役に立っているという自信につながったことと思います。